

小中一貫校におけるキャリア教育推進の実践研究

ー キャリア教育の視点を入れた授業の開発支援を通して ー

学籍番号 219115

氏名 辻 まりや
 主指導教員 餅木 哲郎
 副指導教員 家近 早苗

1. 背景と目的

1.1 問題の所在

平成29(2017)年告示の小学校および中学校学習指導要領総則に初めて「キャリア教育」の言葉を用いて「児童生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と明示された。

実習校は施設一体型小中一貫校となった平成28年度より一貫教育の基盤をキャリア教育とし、9年間を見通した学びや育ちを大切に小・中の異学年交流等さまざまな取組を実践してきた。しかし、教員の大幅な入れ替え、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、教員間でも十分な引継ぎや校内研修ができなかった。また、行事の制限・縮小もあって、実習校におけるキャリア教育の意義を理解し、意識してキャリア教育実践をする教員の減少が懸念された。

1.2 研究の目的

そこで、以下、4点を本研究の目的とした。

- ①実習校の教員がキャリア教育の重要性を理解すること。
- ②教員のキャリア実践への意欲を高めること。
- ③各教科でのキャリア教育実践を増やすこと。
- ④実習校で進めてきたキャリア教育実践が継承されること。

2. 方法

報告者は、6年間勤務した実習校に大学院生として参与観察できる立場であったことから、教員に対してキャリア教育実践に向けたコーディネートをして研修会と授業開発を試みた。

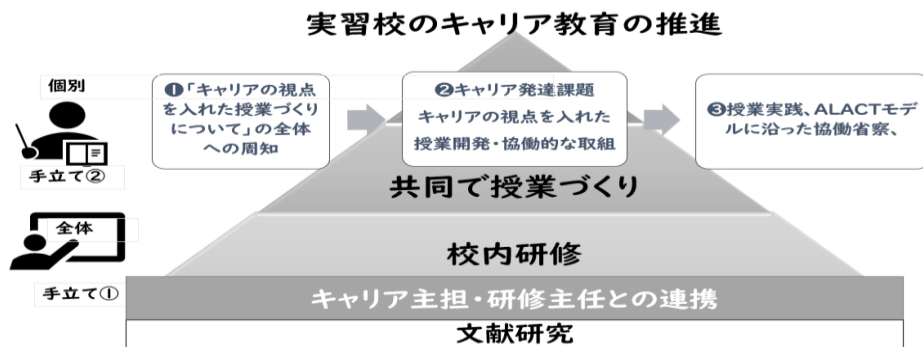


図1 本研究実践のイメージ図

3. 実践の結果

3.1 実践Ⅰ キャリア教育への理解を促す教員全体への働きかけ

実習校の教員のキャリア教育への理解を促し、キャリア教育の実践に向けた意欲の向上を図ることを目的とした推進チームを作り研修会を実施することを目的とした。

実習校のめざす子ども像や異学年交流などの取組を伝え、今後どのような異学年交流ができるか・したいかを教員同士で構想を考えたことでアイデアが生まれ、教員のキャリア教育に対する理解が促された。また、小・中キャリア教育主担と推進チームを結成し、協働して研修を企画・実施したことで推進の理解が深まった。実践を終え、次の課題は、研修を通して深めることができた実践意欲をもとに実習校のめざす教育実践を増やすことであつた。具体的には異学年交流をすることと、教科授業でキャリア教育の視点を入れた授業をすることの2点である。

3.2 実践Ⅱ 異学年交流を入れた実践への個別の働きかけ（音楽）

3～9年生の音楽を担当するA教諭と共同で授業開発をした。目的は、以下の3点である。

- ① 小学生と中学生の異学年交流を取り入れた音楽の授業を共同で開発すること。
- ② 開発した授業を授業者が実践することで子どもたちからキャリア教育で育てたい能力が発揮される姿、その場面に気づくこと。
- ③ 授業者のキャリア教育への理解を促進すること。

①は、中学生が小学生に箏の弾き方を教えることを目的とした異学年交流を取り入れた授業を開発できた。②は、時にA教諭が教えたこと以上のことを中学生が自分なりに小学生に教えるという主体的な姿が見られたことで、基礎的・汎用的能力の要素であるコミュニケーションとリーダーシップを発揮する場面だと気づくことができた。子どもたちがお互いの立場や役割を自覚して行動する姿から、A教諭が異学年交流の効果・教育的価値に気づき、より深い子ども理解へとつながったことで、「やってよかった」とA教諭の非常に満足している言葉が確認されたことから③の目的も達成したことが明らかになった。

3.3 実践Ⅲ キャリア教育の視点を入れた教科学習の授業開発（理科）

キャリア教育の視点を入れた授業を報告者と理科教員が共同してつくり、授業をおこなうことを通して授業者が教科で進めるキャリア教育への理解を深めることを目的とした。

当初、理科でキャリア教育はできないと言っていたB教諭と単元を通した理科の授業開発に取り組んだ。その過程の中で、B教諭がキャリア教育の視点を持ち、教科授業の中でキャリア教育を推進できるという意識が生まれたのが成果である。報告者の共同で授業開発・協働省察を繰り返すという働きかけがB教諭のキャリア教育観を形成し、子ども中心の学習観を得たことで授業改善の視点が生まれた。

4. 成果と課題、提言

本研究の成果は、実習校で実践してきた異学年交流と特別活動を通したキャリア教育の意義を再確認できたこと。また、学習指導要領に示された各教科でキャリア教育を推進するという実習校では未実施だった実践を始めることができたことである。今後の課題は、教科で進める質の高いキャリア教育実践のアプローチ方法をもっと広く教員と考えるようにして、キャリア教育の意義を浸透させていくことである。教科の内容、指導方法にキャリア教育の要素があることを意識して、基礎的・汎用的能力の育成を意識した授業をすることを提言したい。